

キーワード

2022. 6. 21

どんな業界にも、業界特有の用語やその時々キーワードがあるのだと思う。教育界も、ずっと昔から、キーワードが出ては消え、また出てきては消えていつている。少し前ならば、「アクティブ・ラーニング」である。登場の仕方が鮮烈だったためか、言葉だけは瞬く間に広まった。

しかし、その内実はというと、定義や説明は二転三転した。誤解が生まれないようにと何度か修正が入ったためである。ここには、過去の経験が生かされている。今までも、目新しい用語が出てくると、その解釈に揺れやぶれ、幅が出てしまい、混乱が生じた。その用語が意味するところを理解するまでに何年も要したこともある。

今ならば、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」なのだが、案の定、「個別最適な学び」と「協働的な学び」という言葉が別々に独り歩きしている。特に、ICTの影響もあってか個別最適な学びのほうが、よりその傾向が強い。新たな用語だからということもある。

言葉や文章というものは、最後までよく読み、意味を理解しないといけない。だが、多くの人は、最後まで読まない傾向がある。それは、教育界においても同様である。「一体的な充実」がポイントなのである。ICTの活用とも相まって、個別最適な学びばかりが前面に出ているように感じる。

また、個別最適な学びと協働的な学びは、相反するものではないかという疑問をもつ人も多い。一見すると、そうなるのかもしれない。だが、実際の学校における授業では、個別最適な学びと協働的な学びの要素が組み合わさって実現されていくことが多い。授業の中で、個別最適な学びの成果を協働的な学びに生かす。さらにその成果を個別最適な学びに還元するなどである。このようなことを、一体的な充実というのであろう。

協働的な学びが深まるには、個別最適な学びの充実が不可欠であり、協働的な学びを通すことによって、個別最適な学びは、一層確かなものになっていく。個別最適な学びと協働的な学びは、互恵的であり、相互補完的な関係にある。

どうも昔から教育界は、二つのものを二律背反的な図式で捉えがちなどころがある。系統主義か経験主義か、科学か生活か、知識か思考力かといった論議は、極端から極端へと振り子の振り幅を大きくしただけで、余計な混乱を招いてきた。バランス感覚に欠けるのである。もうこのような過ちには終止符を打ちたい。

そもそも個別最適な学びと協働的な学びの往還を原理とした授業づくりは、決して新しいものでも、珍しいものでもない。今年度、野田中学校では、「一人も取り残さない」授業を目指している。多くの先生方が、ぜひともやってみたいと願うような授業には、一人も取り残さない、個別最適な学びの要素が入っているはずである。とどのつまりは、全員が「わかる」授業をしたいのではなかろうか。

新たな用語が出現したことに一喜一憂せず、足元をしっかりと固めて、一人一人の子どもたちをよく見た授業をしていくことが大切である。